

— 告 白 —

KIT
キャンパス
レポート ②
文・杉村裕之

自分は何者かへの探求心 澆^{はつ}刺^{ちゅう}たる国際高専一期生



青木 心路 (あおき こころ)

金沢工業大学大学院工学研究科
機械工学専攻
博士前期課程一年
石川県 国際高等専門学校出身

研究への熱き眼差しの前に、日本人とは何者であるか、好奇心の矢を縦横に放つ青年がいた。取材中、青木さんの話は日本の歴史、宗教、文化、美術、政治まで及んだ。母方の祖母がマレーシア人だそう。その縁もあり、中学二、三年時はマレーシアのインターナショナルスクールに学んだ。現地の富裕層や華僑、欧米から来た仲間とともに寮生活を送った。

「最初は周囲と距離がありました。最初が、アニメやゲーム、バスケットボールなどで打ち解けました。気づいたら、苦手の英語も日常会話やスラングまでできていました」
やわらかな心に染みたのが、クラスメイト個々の価値観やバックグラウンドの多様さである。彼も「自分が生まれた日本とは」を無

意識に考えたであろう。

高校進学は迷った。慣れ親しんだインターナショナルスクールの選択肢もあった。が、好きな飛行機や船の製造に携わってみたいとの夢は断ちがたかった。そんな時、グローバルイノベーターの育成を目指すし、授業をすべて英語で行う国際高等専門学校(ICT)の開校を父から教えられた。今度は何のゆかりもない石川県で、一期生としての一歩を踏み出した。

5年間のICTで特に印象深いのが、地元の歴史や文化を学び、工学的なアプローチで地域資源として活用することに挑んだエンジニアリングデザイン教育という。全日本学生室内飛行ロボットコンテストにも出場し、マルチコプター部門(ドローン)で三位に輝いた。現在も指導を受ける伊藤恒平教授と出会えたおかげだと感謝する。

「先生の特長は、『何事もゼロから始動し、トライ&エラーを重ねる』です。既存のプログラムを使えば簡単ですが、それでは自分が成長しないことが飛行ロボットでよく分かりました」
KITに異動した伊藤教授の後を追うように三年次に編入し、飛行ロボットには四年連続で出場してきた。「優勝するまで終われない」と師弟で誓った約束は、昨年、達成したが、パイロットのいない完全自動化での優勝が新たな目標だ。カギを握るのが機体の事故リスクを抑止する耐故障制御の確立で、進展する社会実装を念頭に、実機での完成に向けて研究を続ける。

将来は、航空宇宙産業のベンチャーで働きたいと話す。仮に、職場が多国籍な環境でも、彼なら何の心配もない。確乎不拔のアイデンティティーで、誰とでも堂々、渡り合える日本人だからだ。

金沢工業大学

石川県野々市市扇が丘七一
電話番号 〇七六二四八二〇〇